

九州朝陽会報

平成二四年七月一日発行 第十八号

連載 「新宿の思ひ出」

第七回 二人の「サユリさん」

九州朝陽会名誉会員

佐藤 喜一(新一回)

長い間学校教師をしていたから、多くの方々に「先生！」と呼ばれ、それに慣れて暮らしてきた。

それだけに別の世界の人から「先生！」と言われると、「おや！」と思う。ましてや、世にときめきたまふ若き女性の「先生！」は、どうしても記憶に残る。私の場合、それはどういうわけか二人の「サユリさん」からのだ。一人は女優の吉永小百合さん、そしてもう一人が歌手の石川さゆりさん、である。



このメロディーは？

昭和四十年代の初め、新宿高校(一代目校舎)は、大学入学資格検定試験の会場となっていた。夏休みにそれは実施されたが、そこ

に吉永さんがチャレンジしに来られたのだった。

私たちは監督に駆り出された。そして偶然、彼女が私のクラスの生徒となった。

監督者は一人。ケイタイ、カンニングなどはありえなかったからのどかだった。私は人気女優の横顔を受験票の写真と見くらべたりしながら、時を見守っていた。

受験票に生年月日が記されていた。あの東京大空襲の三日後が、誕生日だった。「そう、この娘もあるの焼夷弾の匂いを知っているんだ」と思った。十五年の差はあるけれど、親近感をおぼえた。

だから、試験が終了して答案を提出しに来た時、ふっと「出来た？」と声をかけた。「ハイ 先生！」。明るい声だった。

石川さゆりさんは、新宿高校創立六十年記念の同窓会主催祝賀会にお招きし、歌っていただいた。22回の馬場憲治君と結婚したばかりということ、昭和五十七年十月十六日、京王プラザホテル・エミネンスルームの、背景に「興国之鐘」の塔の絵のあるステージで、「津軽海峡冬景色」をはじめ、多くのレパートリーを熱唱された。そうしたご縁で、翌年、生徒たちが学園祭に馬場夫妻を招待し、

トークショウを開催した。この時は二代目校舎。二階の校長室が控室だった。

そこから会場の体育館へとエスコートする役が私。さゆりさんが身ごもっていることを知っていた私は、石の階段を下りる時、思わず「気をつけて！」と声をかけた。「ハイ 先生！」。さわやかな声だった。

旧いお話、である。このお二人は、すでに忘れてしまっているだろうが、私は忘れない。

吉永さんは、今、JR東日本のあちらこちらの停車場に貼られたポスターの中で、いつもほほえんでいる。石川さんは、デビュー四十年を迎えて、今なお笑みをたたえて歌いつづけている。あの時、おなかの中にいた娘さんは、二十八歳になったとか。

二人の笑顔を見るたびに、私には「ハイ 先生！」が甦ってくる。そして、「いつまでも、元気で！」と呟くのである。

(2012年「昭和の日」に)

追記

ウイキペディアによれば、その後吉永小百合さんはめでたく早稲田大学に高卒と同等以上の学力があると認められ、早稲田大学第二文学部西洋史専修に入学した。そして多忙な中、昭和四

十四年同学部を正規の四年間、しかも次席で卒業したという。早稲田大学の先輩、かつ密かなサユリストを自認する編集者記す。また大羽宏一さんの話では、彼女の姉上が10回生の片岡(旧姓吉永)玲子さんで大羽さんの新聞研究部三年先輩とのことだ。

3/11・一年後の

むなししい『絆』

株式会社中陽 相談役

豊田 信夫(新?回)

3月15日に静岡県島田市の桜井市長が「被災地の苦しみを少しでも共有したい」と記者会見して、震災がれきの受け入れを正式表明した。何故このことが大きな見出しで新鮮なニュースとして報道されるのだろうか。

3/11から一年を迎える二〇一二年3/11は確実にやってきた。だが日本全国におなじい閉塞感、停滞感が漂うことを多くの人が感じていたのではないか。3/11直後の日本社会は余りにも凄惨な爪痕を残した未曾有の国難を前に激しいショックを受けながらも、一刻も早く復興に向けて歩き出そうと言う一体感に包まれていた。当初は「がんばろう日本」を合言葉に全国民が東北を救おうと立ち上がったように見えた。

多くのボランティアが自発的に被災地に入りスコップをふるってがれきを片づけたりした。多くの有名スポーツ選手、芸能人が被災地を慰問して炊き出しに精を出した。世界中の人々からは被災者の冷静さと団結力、連帯感が称賛され、世界中から巨額の支援金が寄せられた。『絆』という言葉がやたらと使われ、日本中が一つになって復興に向けて歩みだしたように見えた。

しかし3/11から三ヶ月経った頃から首をかしげるような出来事が相次ぎ『絆』という言葉に早くもかけりが見えてきたように思う。八月に京都で行われた『五山の送り火』で陸前高田市の薪を燃やす計画が直前に中止された。愛知県日進市の花火大会で福島県川俣町製造の花火を打ち上げる予定が直前に中止された。福岡市では福島の農家を救おうとした『福島応援ショップ』の開店が中止に追い込まれた。これら一連の被災地応援イベントの中止は、いずれも「放射能をまき散らす」と言う一部の市民のクレームによるものである。被災地支援のはずが被災地の人々の心を傷つける結果を招いた。放射能に過剰反応の一部の人々を非難するつもりはないが、『がんばろう日本』、『我々は絆

で結ばれている』と言う3/11直後に全国民が抱いた気持ちはどこへ行ってしまったのか。今や『絆』と言う言葉には一年前の重みはない。被災地に放置されたままの膨大な『震災がれき』と言う現実を見る限り『絆』と言う言葉はむなしく響く。



苦しむ被災地をよそに何よりも政治の対応があまりにも遅すぎる。復興の為に与野党が一つになって立ち向かうべきなのが、ねじれ国会の中で不毛の国会討論ばかりで与野党が協調できる体制は一年経っても出来てない。それどころか3/11から三ヶ月後、復興の大事な時に当時の菅直人首相を引きずり降ろす内閣不信任案提出騒動に国会議員はエネルギーを注いでいた。自己の裁判で「自分は天下

国家のことしか考えていない」と言った東北を地盤とする小沢一郎はこの一年間何をしていたのである。スピード感に欠ける政府の対応は復興庁が出来たのが震災後一年経ってからであったことから見ても分かる。

震災後一年経っても泥だらけのがれきがむきだしに積み上げられた光景が目立つ。がれきには汚物、腐敗物等が含まれ悪臭をまき散らして被災地の人々の苦しみは察して余りある。国が要請する震災がれきを被災地以外の自治体に受け入れてもらう広域処理が一年経っても進んでいない。市長が受け入れ方針を示しても放射性物質の拡散を恐れる一部の市民の反対意見で潰されてしまう。一年経たずに正式に受け入れを表明したのは東京都だけだ。それでも処理するのは三年間で五十万トンだけ。二千三百万トンにのぼる総がれき量の2%に過ぎない。東京都にも四千件近くの抗議電話があり8割以上が「子供への影響が心配」「被災地の放射能を拡散するな」と言う内容である。石原知事は記者会見で「みんな自分のことしか考えない、日本人が駄目になった証拠のひとつだ」と嘆いた。石原知事のように自分の信念で市民の抗議を抑えられる首長は見当たらない。

人は誰でも自分と自分の家族が一番大事だ。がれきを処理しないと復興を果たせないことは誰でも知っているが、自分の周りにだけは放射能の危険のあるものは来て欲しくないと言うことであろう。だから島田市のがれき受け入れニュースは新鮮で画期的に映ったのだ。がれきの処理は半年は完全に遅れてしまっている。遅きに失した感はあるけれども失った過去をとかやく言っても仕方がない。国は今すぐに最前線に立って各自治体と一緒に住民への説明を尽くし可能な限りの受け入れを納得させるべきであろう。遅すぎたけれど島田市のニュース以降、各地の県議会、市議会ががれき受け入れに前向きになってきているのはいいことだ。しかしまだまだ現場の処理業務を担う肝心の市町村は消極姿勢と言っている。いつまでも「住民の同意を得るのが困難」とがれき処理協力を背を向けるのは同じ日本人としていかなるものか。

3・11後の一年間、復興に対する政治の対応の遅さに怒りを覚え、「口わざわい大臣」の続出に呆れかえり、政党への苛立ちと政治家の不甲斐なきにうんざりの連続でした。せめて一年前の日本中を覆っていた『絆』が早く蘇って

くるのを願うばかりである。

(2012・4・16 寄稿)

東日本大震災に関し

思うこと

熊本尚絅大学学長

大羽 宏一 (新13回)

昨年四月二日に九州朝陽会のお花見会があり、私は所用で後半の食事会だけに参加させていただきました。この会の前月の三月十一日に東日本大震災があったことから、飲むほどにこの震災の話題となったことを覚えております。特に、皆さんの昔の勤務先が、電力、鉄鋼、土木などの主要企業（このような企業の方々がたくさんおられるのも朝陽会らしいところでしょう）であったことから、原発事故やその政府対応などが中心となりました。

私は熊本の大学に勤務しておりますが、この地震により関東以北の大学では、卒業式が実施不能となったたり、また入学式が延期されるなどの報道がなされていきました。幸いなことに九州のほとんどの大学では、当初の予定の日程で開催できたと聞いています。被災者の皆様に対するお見舞いについては、卒業式、入学式とも学長式辞の冒頭でこれを述べ、速やかな復興をお祈り申し上げます。

科学や技術の発展とともに、多くの疾病や災害に対する予防や対処策は戦後飛躍的に向上したと言えますが、こと地震については未だ楽観的な状態にはないということができるといえます。東京大学の地震学者であるロバート・ゲラー教授は、日本で一九七九年以降発生した十名以上の犠牲者を出した地震をすべて調査したところ、その多くが比較的リスクの低いところで起こっていたとネイチャー誌に発表しています。つまり残念なことに地震予知は不可能に近いということになります。また、カナダの自然科学者のフロリン・ディアクは「現在では漠然とした予測しかできない。地殻プレートの正確な位置が分かっているから精密なモデルが作れない。だから最善の方法は、地震の多い地域で建築基準を強化するくらいである」(『科学は大災害を予測できるか』)との厳しい指摘をしています。

私たちの祖先は温帯ジャポニカを持ちつつ、稲作の最適地を探しこの列島に大陸から移住したところが多雨・多湿のモンスーン地域で、かつ地震の多発地帯といえるべき極東の地域であったといえます。そしてこの列島では、世界の地震の約一割(マグニチュード6以上

に限れば約二割)が発生しているわけですから。

改めてこのこと(リスクの多い列島であること)を常に念頭に置き、我が国の諸政策を決定していくことが求められていると思う今日この頃です。

(2012・4・24 寄稿)

卒業三十五周年同期会

下京して

八代市立金剛小学校跡次分校

沼田 京子 (新29回)

五月十九日、同期会に参加するため、東京に行ってきました。実は息子二人が兄は慶応四年、弟は早稲田二年に在学中です。良い機会なので、六大学の野球観戦もしてきました。早慶戦は一番有名ですが、それでは、どちらを応援したらいいか決めかねます。そこで、一日に両方の大学対別の大学の対戦をさがすと、丁度十九日が、早稲田対明治と慶応対立教の2試合の日でした。

朝十時半、観戦を目的に上京した主人と息子二人と四人で神宮球場に向かいました。二試合五〇〇円の学生券を息子が購入し、学生席に入りました。応援団やチャイマルの指導のもと、炎天下、紙のメガフォンをたたいたり、大声を

だしたり、応援歌や校歌を肩を組んで歌ったりと学生に戻ったような雰囲気を感じながら明治対早稲田の試合を観戦しました。結果は3対3の同点でした。足早に、地下鉄で新宿の同期会会場へ向かいました。新宿のプリンスホテルの地下のレストランが会場でした。地下街のpromenade商店街からが入口になっていると聞いていましたが、まず、大江戸線の新宿駅で西口に出てしまい、東口にどうやって回ったらいいのかわからず迷子になってしまいました。三十五年前の新宿とは大違いですね。



佐藤先生を囲んで29回B組の仲間

十分ほどお休ませてやると会場に着きました。二時からの同期会には百人も集まり、立食でしたが、お酒や料理を片手に話はずみでした。佐藤先生、古川先生、戸田先生、小宮先生、井村先生、菅先生

方とたくさんさんの恩師の先生方にも来ていただききました。八十歳を越えていらっしゃる先生もおいでかと思いますが、とてもお元気でビックリしました。途中の余興で、E組が文化祭で制作した映画が上映されました。SFで、特撮もありましたが、まるで今を予言したように富士山の爆発や津波、あやしい預言者を崇拜する信者たちもでてきました。ロケットを発射するシーンでは煙や火も出て、みんなから、思わず拍手がでました。女子の服装や男子の長髪など、当時を思い出させるものでした。話はとどまることもなく、五時半からのクラス会が八時に終わってもまだ、物足りず、新宿の街へとくりだしました。「五年後にまた会いましょう」という合言葉を互いにかわして、新宿をあとにしました。

(2012・5・25寄稿)

事務局からのお知らせ

・今年度総会

今年度総会は過日の幹事会にて左記の日程で開催することに決まりました。会場など詳細については後日ご連絡しますが、皆さん参加に向けて予定されることを期待しています。

平成二十四年十一月十一日(日)

午後四時から午後七時

・会員動静

五月末日現在、芝原哲也さんの入会があり、会員は65名となりました。

新規入会員

芝原 哲也 (新17回卒)

連絡先

①〒252-0132

神奈川県中郡二宮町緑が丘

3ノ4ノ18

電話 0463(71)7846

②〒838-0103

福岡県小郡市三国が丘1ノ91

電話080(1152)5169

ご本人から事務局宛入会希望のメールがありましたので、自己紹介を兼ねて左記に転載いたします。

年会費納入のお願い

今年度会費は6月末日現在3名の方が未納です。未納の方には振込取扱票を同封しますので9月末までにお納めください。納入なき場合は規定により、残念ながら退会の意思表示と判断させていただきます。

編集後記

十八号会報は、時節柄原発問題をテーマに特集しようと、世代を越えた会員各位のご意見を期待しましたが、残念ながら思うように集まらず意図はたせませんでした。

しかし原発再稼働については、結局その安全性もやむやなうちに、またも経済優先の電力確保を絶対視して、大飯原発の再稼働を足がかりに、なし崩しに既存原発の再稼働に進みそうな

【発行元】

九州朝陽会事務局

福津市若木台1丁目
20-7

Tel/Fax:0940-43-5545

Mail:kjun612@nifty.com

【編集者】

九州朝陽会 幹事長

小泉 純理

(新7回)

編集者記

気配を感じます。原発依存の前に、昨年の未曾有の大震災を機会に、政治家はもとより我々は、戦後日常生活の物質的豊かさや便利さばかりを求め、ひたすら経済成長を追求してきたこれまでのライフスタイル、あるいは社会のあり方を真剣に考え直す必要があるのではないのでしょうか。佐藤先生のカット楽譜は森昌子のヒットソング「先生」でした。

小泉 様

初めてメールをとらせていただきます新17

回生の芝原と申します。九州朝陽会事務局の連絡先を同窓会誌「朝陽」NO.61で知りコンタクトをとらせていただきます。

これまでも仕事の関係で神奈川と福岡で二重生活をしてまいりましたが、次第に福岡での生活が増えてきましたので九州朝陽会に入会して皆さまの仲間に加えていただきたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

私と九州とのかかわりは、父が国家公務員だった関係で昭和26年から30年まで長崎市に住んだのが最初で、次の関わりは大学を卒業して就職したのが三菱化成(現三菱化学)で最初の配属先が北九州の黒崎工場でした。その次のかかわりはダウケミカル日本に転職した後、福岡県の小郡市に小郡開発センターを設立したことでした。黒崎時代を除いて福岡県に住んだことはなかったのですが、定年の数年前にリタイアメント・ハウスを小郡市に建てて以来、神奈川を本宅、小郡を別宅として生活しております。昨年は東日本大震災や福島原発事故のためにほぼ一年の半分を小郡に疎開してきておりました。今年はほぼ一カ月ごとに神奈川と小郡を往復しております。

芝原哲也

